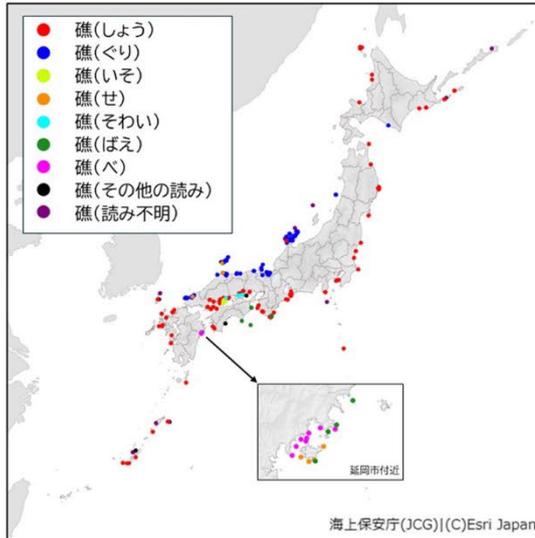


河合 晃司，社 泰裕（情報管理課），藤井 智雄（技術・国際課 海洋研究室）

海図において、浅瀬の地名に「礁」が使われているものは全国で300箇所ほどみられ、その読み方は多様である。「礁」の文字の読みについては、漢和辞典によると「しょう」と「せう」との読みが記載されているが、浅瀬の呼称に現れる「礁」の読みはそれだけに止まらない。

図1. 礁の読みに関する全国の分布図。



「礁」が使われている浅瀬地名の分布を図1に示す。

「しょう」と読む浅瀬の地名は最も多く110箇所ほど存在。「しょう」は全国的にみられるものの、日本海側ではほぼみられず、概ね太平洋側全体及び瀬戸内海に分布しているといえる。

「ぐり」と読む浅瀬の地名が2番目に多く100箇所ほど存在。「ぐり」は日本海側に多くみられ、特に山口県西部から福井県西部の日本海側の区域および能登半島に集中している。

「ばえ」，「せ」，「べ」の読みがそれぞれ10箇所程度存在。

「ばえ」は、紀伊半島南岸から九州東岸にかけての太平洋側に分布。

「せ」は、宮崎県延岡市の島浦島周辺などで確認できる。

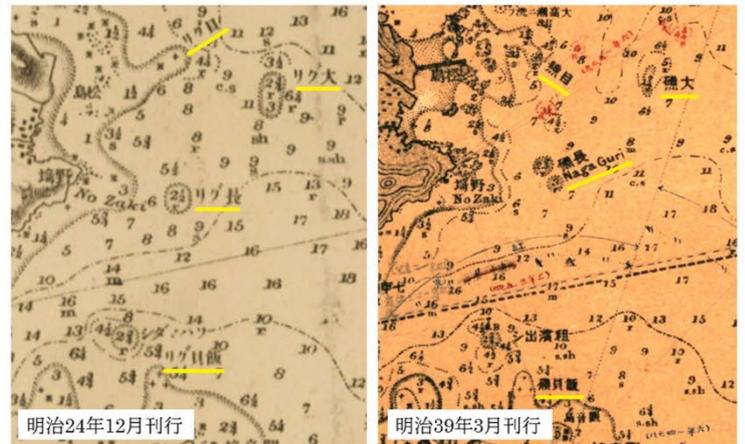
「べ」も、宮崎県延岡市の北浦港付近のごく限られた区域に存在。

「いそ」，「そわい」の読みが数箇所存在。

「いし」，「いわ」，「ざ」，「じま」，「ぞね」，「ね」が僅かに存在。

図2. 海図第二百一十一号(七尾湾)

明治24(1891)年と明治39(1906)年の比較。



特に数の多い「ぐり」と呼ぶ「礁」について、明治時代の海図により、その変遷をいくつか確認したものを図2及び図3に示す。

これらを見ると、元々海図に「グリ」と記載されている浅瀬が、「礁」に置き換わり、その際に読みについてはローマ字表記が「Guri」としてそのまま残されているものがいくつも確認できる。

図3. 海図第二百二十四号(隠岐諸島)

明治26(1893)年と明治36(1903)年の比較。



これらのことから、当時、海図を刊行していた海軍水路部は、明治30(1897)年前後から海図の刊行に併せて、意図的に「礁」に置き換える方針があったのではないかと推察できる。地名はもとより、海図の表現方法も大きく変わっており、この間に海図記載事項の統一を図った可能性がある。

このように「礁」のつく浅瀬は全国に分布しているが、地名の「礁」とその読みの関係については、地域で呼称されている読み、浅瀬の意味を持つ「礁」の漢字を当てはめたことが考えられる。

さらに、現地調査から取得した漢字を使用したものと海軍水路部の表現の統一によるものの両方が考えられるが、明治時代の海図記載内容の変遷やそれに関する資料を詳しく調査することで、当時の海図への浅所の名称の表記についての説明が可能になるであろう。